



石製トーテムポール模型

ハイダ

高さ18.5cm 幅5.5cm

奥行き7.0cm

北方民族博物館だより
—39号—

特別展	トーテムポールとサケの人びと —北西海岸インディアンの森と海の世界—	2
講演会	トーテムポールとサケの人びと	5
講座	北西海岸インディアンの歴史と文化	7
講習会	北西海岸インディアンのミニチュア・ボタンローブづくり	8
お知らせ・表紙・記事		9
ニュース		10

トーテムポールとサケの人びと

平成12年7月18日(火)～9月24日(日)

北アメリカ・北西海岸—アラスカ州（アメリカ合衆国）南部からブリティッシュ・コロンビア州（カナダ）、ワシントン州（アメリカ合衆国）にかけての太平洋沿岸部—では、巨大な針葉樹の森林が発達し、陸地深くまで入り込む湾とたくさんの島々によって、複雑に入り組んだ森と海の世界が形作られています。

北西海岸インディアンと総称されてきたこの地の先住民は、豊富な海・川の水産資源と木材資源の利用に基づいて、定住的集落、階層制、出自集団などの社会組織、トーテムポールや仮面ダンスなどに代表される複雑な儀礼や高度な芸術を発達させてきたことで知られています。

本特別展では、北西海岸インディアンの文化における高度な資源利用、精神世界、芸術の特徴などを紹介しました。次にその概要を報告します。

* * *

■北西海岸の自然と民族

北西海岸は、高緯度のわりに温暖で降水量が多く、植物の生育に適しています。そのため、50m以上の高さにまで成長するシーダー（ヒノキ科）やスプルース（マツ科）、ヘムロック（マツ科）といった針葉樹が深い森林を形成し、夏から初秋にかけては、スグリ類やキイチゴ類など食べられるものだけで40種類を超えるベリー類が実をつけます。また魚類、海獣類、貝類、海藻類など、豊かな水産資源に恵まれた地域でもあります。

最終氷期の後、この北西海岸地域にはさまざまな文化的背景を持った人びとが住みつきましたが、10,000～5,000年前までにこれらの文化は均質化し、北西海岸全体としての共通性を持った文化領域が形成されたと考えられています。

■森の世界

北西海岸インディアンは樹木の伐採や加工の技術に優れ、家やカヌー、調理具、食器など、生活に必要なものの多くを木で製作しました。

日用品の材料としてもっともよくもちいられたのは、シーダー類の樹木でした。樹木は、丸太のまま家の柱やカヌー、トーテムポールなどに使わ

れたほか、板材を熱して折り曲げ、食物や油の貯蔵用または調理用の木箱が作られました。また、北西海岸インディアンの日用品の多くには、表面に装飾的な彫刻が施されていますが、こうした彫刻には曲刃のナイフがもちいられていました。

シーダー類の樹皮は、外皮は壁や屋根を葺く材料として、内皮はマット、バスケット、帽子、衣服、縄の材料としてもちいられました。ほかにシーダー類やスプルースの根も細かく裂いてバスケットや帽子を編むのにもちいられました。



■水産資源の利用

北西海岸インディアンは、食物の大部分を海や川の水産資源に依存していました。

アザラシ類やイルカ類、ラッコなど、小型の海獣類を対象とした狩猟が広くおこなわれ、一部では捕鯨もおこなわれていました。

また、オヒョウやタラ、ニシン、ユーラコン、5種のサケ類（マスノスケ、ギンザケ、ベニザケ、シロザケ、カラフトマス）などが捕獲され、利用されました。なかでも初夏から秋にかけて回帰するサケ類は重要で、大量に捕獲され、乾燥・加工されて、冬の食物として保存されました。

北西海岸インディアンの漁撈具で特徴的なのが、オヒョウやタラなど大型魚類用の釣り針です。北部では、木製の2つの材を組み合わせたV字型の釣り針でオヒョウが釣られました。南部では、オ

ヒョウやタラ、メバルなどの漁に、蒸し曲げで作られたU字型の釣針がもちいられていました。

北西海岸では、カヌーが交通や漁撈に重要な役割を果たしていました。これらのカヌーは、大型で高い船首と垂直の水切りをもつ北部タイプ、波の穏やかな内海で使用された船首の角度がゆるやかなタイプ、外洋航海や捕鯨にもちいられた西海岸タイプ、おもに河川でもちいられた幅が狭いタイプの4つに分類されます。本コーナーでは、カヌー、パドル、あかくみなどの実物資料のほか、さまざまな型のカヌー模型を展示しました。



■北西海岸インディアンの社会

北西海岸では、豊富な資源の蓄積に基づいて、狩猟採集経済でありながら大規模な定住的集落や階層制がみられました。また、共通の祖先を持つ人びとが出自集団を形成したり、大型の家屋にいくつもの家族が同居して生活単位（「家」）を構成するなど、複雑な社会組織がみられました。個々の出自集団や「家」は、猟場や漁場、特定の名前、紋章（crest）などを占有する権利を持っていました。

北西海岸インディアンの出自集団の紋章として、さまざまな動物や植物、神話上の生物、気象現象、水の渦や潮流、火などがもちいられてきました。紋章は、家、トーテムポール、墓、カヌー、儀礼用の皿やスプーン、ボタンローブやシャツ、帽子、仮面、楽器類など、さまざまなものに描かれたり、その表面に刻まれたりして表現されました。こう



した紋章は、北西海岸インディアンの自然観の反映であると考えられます。本コーナーでは、トーテムポール、仮面、儀礼用具など、紋章が刻まれた資料を展示しました。

ときに20mにも達する巨木に彫刻が施されたトーテムポールは、北西海岸インディアンの物質文化のなかでもっとも目を引く存在です。トーテムポールには、数家族が暮らす大型の「家」の内部にある「家柱」、「家」の正面に取り付けられる「入口柱」、故人を記念する「墓柱」、特定の個人の業績や出自集団を象徴する「独立柱／記念柱」の4つの種類が知られています。これらのトーテムポールの彫刻は、全体で個人や集団の経歴を示す物語を表現しています。本展示では、1982年に開催された北海道博覧会の際にアラスカ州政府が出品し、その後北海道に寄贈されたトーテムポールのほか、トーテムポールの模型、写真などを展示しました。

北西海岸インディアンにとって、冬季は蓄えられた富の分配がおこなわれる儀礼の季節でした。特に南部諸族の間では、神話を題材とした演劇やダンスを上演する秘密結社（特定の階層集団のみに加入が許される排他的組織）が発達し、冬の儀礼の期間には他の季節とは異なる社会組織がみられました。

「ポトラッチ」は北西海岸インディアンの各集団でみられた大宴会を指す言葉です。ポトラッチは、子どもの命名、女子の初潮、結婚、死といった人生の節目で催され、大勢の客を呼び集めて踊りや演説をおこなったり、ご馳走や贈り物を振舞っ

たりすることによって、周囲の尊敬を集めたり、個人名や地位、世襲の特権を主張するといった役割を果たしていました。

本展示では、冬季の儀礼やポトラッチで使用する仮面、儀礼用の衣類、楽器類、食器などの儀礼用具を展示しました。

■交易と戦闘

北西海岸インディアンの人びとは、隣接する集団間、イヌイト（エスキモー）やアサバスカインディアンなどの集団との間で、交易などの友好的な関係ばかりでなく、戦争といった敵対的な関係をもっていました。

18世紀後半から、欧米人が北西海岸を訪れるようになりました。欧米人との交易は、北西海岸インディアンの社会や文化に大きな影響を及ぼし、多くの文化的要素が失われる結果となりました。

本コーナーでは、交易品としての銅板、欧米人向けの土産物として発達したアーザライト（珪質粘板岩）製の彫像などを展示しました。

■現代に息づく伝統

1960年代以降、非先住民の理解と北西海岸インディアンの自助努力によって、各地でさかんに文化復興運動がおこなわれるようになりました。

物質文化の面では、伝統的な彫刻や繊維加工の技術、動物や自然現象を象徴化したデザインなどが受け継がれています。彫刻や仮面、バスケット、シルクスクリーン（版画）などの工芸品が現在も産み出され、一部は美術品としての評価を得るようになってきています。さらに、こうした工芸品や歌と踊りなどの伝統芸能を旅行者にアピールすることによって、観光業による経済振興がおこなわれている地域もあります。

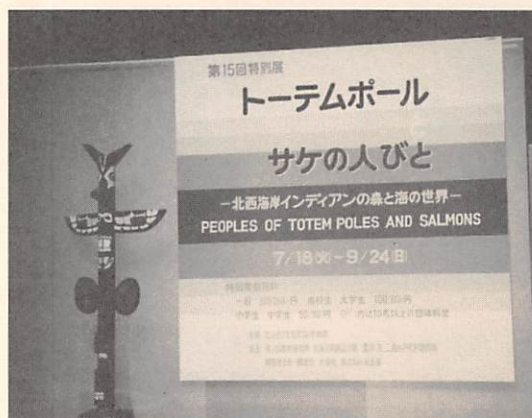
このコーナーでは、土産物として販売されている工芸品や観光客にも開放されているポトラッチの記念品など、伝統文化の現状を示す資料を展示しました。

また、国際先住民年（1993年）以降、先住民の権利回復や文化復興の動きはよりいっそう活発に

なり、民族間の国際的な交流という形に発展してきています。こうした民族間交流の一環として、萱野茂・二風谷アイヌ資料館に寄贈された北西海岸インディアンの仮面などの資料も展示しました。

一方、こうした交流とは別に、北海道では多くの市町村が北西海岸地域の自治体との間に姉妹提携を結び、交流をおこなっています。北海道南部・胆振支庁にある大滝村は、1989年にバンクーバー島南東部に位置するレイク・カウチン村と姉妹提携を結びました。当地・網走市も1986年にバンクーバー島中央部に位置するポートアルバーニ市と姉妹提携を結んでいます。

このコーナーでは、大滝村、網走市の姉妹都市交流の様子を写真パネルを中心に紹介しました。



■謝辞

本特別展を開催するにあたり、資料、写真、情報の提供などにつきまして、次の機関および個人にご協力いただきました。

記して感謝申し上げます。

国立民族学博物館、北海道開拓記念館、萱野茂・二風谷アイヌ資料館、岡田淳子氏、網走市、大滝村、株式会社総北海

（学芸課 中田 篤）

トーマスポールとサケの人びと

講師 岡田 淳子氏 (北海道東海大学)
 ダン グッドマン氏 (財団法人日本鯨類研究所)
 岩崎 まさみ氏 (北海学園大学)

平成12年7月29日(土) 13:00~16:30 当館講堂

北西海岸インディアンの伝統文化と現在の状況について、現地で実際に調査研究をおこなってきた3名の研究者をお招きし、それぞれの立場からご講演いただきました。

次に各講演の概要を報告します。

* * *

■岡田淳子氏 (北海道東海大学)

「アラスカ・チムシアンの開発を支えた女性たち」

チムシアンは、カナダのプリティッシュ・コロンビア州に住んでいる北西海岸インディアンの一集団である。1857年にチムシアン居住地を訪れたイギリス人宣教師W.ダンカン¹は、現地語を習得して布教活動を開始し、チムシアンを次々とキリスト教に改宗させていった。しかし、当時のチムシアン社会の構造原理となっていた首長制は根強く、キリスト教に改宗しながらも、相変わらず伝統的な習慣を持ち続ける者も多かった。ダンカンは、自らが理想とする社会を築くため、彼の方針に共鳴した者たちを引き連れ、1887年にアラスカ州アネット島に移り住んだ。アラスカ・チムシアンは、その子孫たちである。

他の北西海岸先住民と比較して、アラスカ・チムシアンは近年まで順調な開発と近代化を進めてきているが、これには女性たちの力が大きく関わっていた。

ダンカンは、基礎教育の普及や経済発展に力を注ぎ、女性についてもその力を社会に活かすべきと考えていた。しかし、その一方でダンカンは「先住民は基礎的な学力を身につければ充分」とする差別的見解を持っており、女性の地位についても当時のイギリスにおける女性の役割の範疇^{はんちゆう}で考えていたと思われる。

ダンカンの死後、世界的な不況などによって経済的に追い詰められていたアラスカ・チムシアンの社会は、アルコール中毒やそれに伴う暴力事件などで荒廃していった。しかし、1930年代には、女性たちがアルコール禁止を訴える署名運動を起こすなど、女性が率先してチムシアン社会を立て直す動きを始めた。第2、第3世代の女性たちのなかから、奨学金を得て島を離れ、上級学校に進

学する者が現れたのもこの頃であった。

その後、1960年代には高等教育を受けた女性たちが地元に戻り、専門的な知識をコミュニティーに還元し始めた。そして、そうした親たちの世代をモデルとして、次世代にも高等教育機関に進学する者が増加した。また、伝統的な社会制度、つまり外婚制と母系制がチムシアン社会の発展に有利に働いたことも見逃せない。進学などのため島外に出た女性たちが、外婚制に従って優秀なパートナーと結婚し、母系制によってそのパートナーともども島に戻るといったケースが相次いだ。

そして1990年代には、ほとんどすべての女性が進学し、専門的知識を身につけてUターンするようになった。女性は、政治家、教師、医療関係者、芸術家、会社員など、あらゆる分野に進出し、こうした女性の力によって経済上、生活上のアイデアが次々と創出されてきている。

■ダン グッドマン氏 (財団法人日本鯨類研究所)

「IWC (国際捕鯨委員会) 規制下でのマカーの捕鯨活動」

アメリカ合衆国ワシントン州に居住してきたマカーは、海を生活の基盤としてきた先住民であり、1,500年の捕鯨の歴史を持つと考えられている。しかし、商業捕鯨によるコククジラの減少や政府によって生活基盤の農業への転換が進められたため、捕鯨は長い間おこなわれていなかった。1999年、マカーの人びとは、70年ぶりにコククジラを捕獲した。本発表では、国際捕鯨委員会 (IWC) と先住民生存捕鯨との関わり、またマカーの捕鯨が準備・実施された状況について報告する。

コククジラは、IWCによって1946年に商業捕鯨の対象から除外された。カリフォルニア半島沿岸で出産する系統群サイズは、商業捕鯨によって減少していたが、現在では商業捕鯨以前あるいはそれ以上の26,000頭程度まで増加している。

1996年マカー部族協議会はアメリカ政府に対し、IWCに先住民生存捕鯨としてマカーのコククジラ捕獲枠を要求するよう要望した。マカーの捕鯨は、法的には1855年に政府との間で交わした条約によって認められていたが、反対議論を抑えるた



左から岩崎まさみ氏、ダン グッドマン氏、岡田淳子氏

め、敢えて政府と IWC を通して捕鯨の承認を求めたのだった。

IWC では、1982 年に承認された先住民生存捕鯨の管理規則により、捕獲枠を獲得するためには対象となる人びとにとって捕鯨自体やクジラの肉・脂が文化上、栄養上、生業上いかに重要かを示す必要があった。アメリカ代表団は 1996 年、1997 年と、マカーの捕鯨の文化的重要性や、資源量に影響がないとする科学的根拠を示して年間 5 頭のコククジラ捕獲枠を求めた。1997 年には、アメリカはロシアと共同で、コククジラの捕獲枠を 5 年間で 620 頭、各年の限度は 140 頭とする提案をおこなった。これはそれまでロシアの先住民チュクチの先住民生存捕鯨に対して与えられていた頭数である。議論の末、提案された文章に「先住民であり、伝統的な生存のための必要性が認められている人びとのため」という文言が加えられ、投票をおこなわずにこの案は承認された。

この承認は、アメリカやマカーにとっては IWC がマカーの捕獲枠を認めたことを意味した。一方、反捕鯨国にとってこの文言のあいまいな表現や投票をおこなわない承認は、新たにマカーの捕鯨を認めたわけではなく、チュクチの先住民生存捕鯨を継続したとすることができる。その後、アメリカ・ロシア二国間の合意で、ロシア側からマカーに 5 頭のコククジラ捕獲枠を譲渡し、その代償としてアラスカ・エスキモーのホッキョククジラ捕獲枠から 5 頭をロシア側に渡すことが決まった。

1998 年 10 月、丸木舟でトレーニングを受けてきたマカーの捕鯨者 8 人が鉄製の銛、プラスチック製の浮き、そしてクジラの致死時間を短縮するためのライフルを装備してクジラの探索を開始した。一方、彼らの周囲では、モーターボートやカヌーなどで反捕鯨のデモが繰り広げられ、捕鯨の妨害がおこなわれた。

この年にはクジラは捕獲されなかったが、翌年 5 月 17 日ついに 70 年ぶりにコククジラが捕獲された。シアトル・タイムスによれば、捕鯨者の妹の一人は「捕鯨は、自分たちがどのような民族であるのかを子どもたちが知るのに役立つ。マカーの過去と未来が 1 日にして融合したような嬉しい気持ちである。」と語ったという。その一方で、捕鯨がおこなわれた後も反対運動は継続し、新聞社には数百通の抗議文や怒りの E メールが寄せられ、マカーに対しても脅迫が相次いだ。

5 日後、シーダーのカヌーを先頭にしてパレードがおこなわれた。1,000 人以上のマカーがポトラッチをして祝い、その日の特別ゲストであるクジラに祈りを捧げたのであった。

■岩崎まさみ氏（北海学園大学）

「北西海岸先住民によるサケ漁の過去と現在」

北西海岸先住民は、サケ類、ニシン、オヒョウなど、おもに海の資源に依存した漁撈民であった。なかでも 5 種類のサケは、各地の川に大量に遡上したため、重要な食料源となっていた。

カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州では、1800 年代中頃まで政府からの規制がない状態で先住民がサケ漁をおこなっていた。サケ漁は、主に河川で血縁者を中心とした 70～100 人程度の集団によっておこなわれ、漁場の条件に応じて地域的な漁法、保存方法が発達していた。各集団が固有の漁場を持ち、集団の首長がその管理権限を持っていた。首長は、ポトラッチと呼ばれる宗教儀礼の場で、漁の獲物や交易で得た品物を分配することによって資源管理者としての評価を受けてきた。こうした伝統的漁業の時代には、各集団が長い年月をかけて蓄積してきた知識や経験が、サケ資源の管理に活かされていた。

1800 年代後半になると、ブリティッシュ・コロンビア州に非先住民によってサケ缶詰製造工場が建設され、缶詰加工用のサケを捕獲するための商業漁業が成立した。商業漁業を保護するため、1888 年に制定された漁業法では、先住民の伝統的なサケ漁が規制された。

北西海岸インディアンの歴史と文化

講師 中田 篤 (当館学芸員)

平成12年7月20日(木)

商業漁業では、海に刺網を仕掛け、缶詰用としてベニザケを選択的に漁獲した。伝統的なサケ漁では、河川ごとにサケの資源管理をおこなうことができたが、商業漁業ではそうした管理が不可能となる。商業漁業によるサケの乱獲、近代化に伴う開発・森林伐採などによる生息環境の破壊によって、サケの資源量が減少していった。

先住民の権利という観点でみると、カナダ政府は当初先住民を白人社会に同化させる政策を展開してきた。しかし、1973年の「先住権」を認める最高裁判所判決を契機に先住民政策は大きく転換する。1982年にはカナダ憲法に先住民の権利規定が盛り込まれ、以降権利の内容に関してさまざまな議論・裁判がおこなわれた。1990年には政府が先住民の漁業に関与する際に、先住民の文化的社会的要素を尊重するべきとする判決が下され、政府が先住民の漁業を管理する場合、資源保護に次いで先住民の生存漁業を重視する政策が展開された。

しかし、この10年間にサケ漁業全体に占める商業漁業の比率は高まり、先住民がサケ漁に関わる比率は低下している。サケ資源量の減少は深刻化し、政府の操業合理化策によって先住民を中心とした零細漁業者は不利な立場に追い込まれている。

厳しい状況下でも北西海岸先住民のなかには「サケの民 (Salmon People)」であるという誇りを持ち、政府主導のサケ資源管理から、先住民漁業者主導による資源管理への移行を模索する動きがみられる。

現代社会のなかで伝統的な生業を維持するために、先住民の豊富な経験と知識を活かして資源管理に関与する「政府と先住民の共同管理 (co-management)」の動きは、カナダ各地で顕在化してきている。こうした動きや土地の権利に関する交渉の進展によって、この地のサケ漁の将来が決定されていくと思われる。

(学芸課 中田 篤)

第15回特別展の関連事業として、講座「北西海岸インディアンの歴史と文化」を開催しました。次にその概要を紹介します。

* * *

北西海岸インディアンの伝統的な文化の特徴として、高度な樹木の伐採・加工技術を持っていたこと、食物の大部分を水産資源に依存していたこと、狩猟採集経済でありながら、大規模な定住の集落、階層制、出自集団など、複雑な社会組織を発達させていたことが挙げられる。

18世紀後半から始まった欧米人との交易は、毛皮獣狩猟の重要性の高まり、欧米からもたらされた道具類や食物への依存、キリスト教による精神文化や生活習慣の変化などをもたらした。また、伝染病によって免疫を持たない北西海岸インディアンの人口は激減し、欧米人定住者の文化的・社会的影響によって、北西海岸インディアンの多くの文化的要素が消失した。

1960年代以降、文化復興運動の高まりにより、学校教育のなかに各集団の言語指導を取り入れるなど、文化を次代に伝えていくための努力がおこなわれている。また、彫刻や仮面、バスケット、シルクスクリーン (版画) などの物質文化は工芸品や美術品として、歌や踊りなどの芸能は観光資源などとして継承されている。



* * *

本講座では、講堂で上記のような説明をした後、特別展示室で資料を前に展示解説をおこないました。特に木製品の彫刻や色鮮やかなシルクスクリーン (版画) が参加者の関心を集め、講座終了後も熱心に見入っている姿がみられました。

(学芸課 中田 篤)

北西海岸インディアンのミニチュア・ボタンローブづくり

講師 笹倉 いる美 (当館学芸員)

平成12年8月12日(土) 14:00~16:00 当館講堂

8月12日には、開催中の特別展にあわせ、『北西海岸インディアンのミニチュア・ボタンローブづくり』を開催しました。

北西海岸インディアンの間でかつて使われていたローブには、スプリューの根やシダーの樹皮を編んだもの、シロイワヤギの毛を材料にして、一年以上をかけて作られた「チルカットローブ」や「レイブズテイル（ワタリガラスの尾の意味）」とよばれる織物がありました。

そして、ハドソン湾会社やロシアと交易を行うようになり、ラシャやフェルトがこの地にはいるようになってから、ボタンローブが作られるようになります。

ボタンローブは現在でもセレモニーや踊りの際に着用されています。赤、黒、濃紺、ときに緑色の布地に動物や太陽などの出身集団の紋章がアップリケとその周囲を飾るボタンによって施されています。ボタンが数多くつけられているため、ずっしりとした重さがあります。

実際は着用する人の身丈にあわせて作られますが、今回の講習会では時間の制限もあることから、20cm四方のフェルトを使って、ミニチュアのボタンローブを作成することにしました。文様はシャチとワシの二種類を用意し、好みのほうを選んでいただきました。



枠をとってから、図案のフェルトを地のフェルトに縫い付けます。次に、図案をふちどるように、ボタンをつけてゆきます。こうすることによって、ぐっと華やかさが加わります。以前は貝からつくられていたボタンが使われていました。

夏休み期間中とあって、家族連れや、本州からの参加者もありました。図案を縫い付けるアップリケも、ボタンを縫い付けるのも根気のいる作業となりましたが、みなさん真剣に取り組まれ、できあがりに満足されていたようです。

(学芸課 笹倉 いる美)

ホームページリニューアル

当館のホームページをリニューアルしました。行事案内や施設紹介、過去の特別展示の概要ほか、近隣博物館情報や北方研究者の業績も掲載しています。ぜひご利用ください。

URLも変更になりました。

<http://www.ohotoku26.or.jp/hoppohm/>です。



今号の表紙

—石製トーテムポール模型（ハイダ）—

トーテムポールは「彫刻を施した柱」で、大きく4種類に分けることができる。家屋の内部に立てられた比較的小型の「家屋柱」、家屋の正面に取り付けられ、家屋への入り口を兼ねる「入口柱」、柱の内部に火葬された故人の遺骨を納め、故人を記念する「墓柱」、家屋のそばに立てられ、特定の個人の業績や家集団の属する氏族やリネージ（系譜関係を具体的にたどることができる集団）などの人間集団を象徴する「独立柱（記念柱）」の4種類である。北西海岸インディアンは、動物の超自然的な力を信じており、動物たちをトーテムポールや社会集団の紋章として使用している。

表紙の写真は北西海岸インディアンの中のハイダの彫刻家が製作したアージライト（珪質粘板岩）製のトーテムポールの模型である。上から「霊力のある女性」、「シャチ」、「クマ」が彫刻されている。

トーテムポールは5000年以上前まで遡る北西海岸インディアンの木彫りの伝統から生まれたもので、従来木で作られていた。18世紀以降の欧米人との接触により、北アラスカ・北西海岸に多量の鉄器が流入するようになったため、ハイダは、鉄器を使って比較的加工しやすいアージライトを用いて、交易品としての小型トーテムポールや皿などを製作するようになった。現在では芸術作品として位置づけられるものもある。

今回の特別展の入口を飾ったトーテムポールは網走市内の小学生4人（左から一色隆太君／上野誠人君／金谷直祈君／上野嘉人君）が博物館クラブで作りました。


 みんなで こうこ はくぶつかん
in 北海道

このコーナーでは当館の活動に関連する分野の新聞記事のうち、道外ではあまり紹介されていない情報を掲載します。

- 7/4（火） 五十万年前のものと推定される前期旧石器時代の石器が牧草地露出土から発見、清水町/A
- 7/14（金） 上ノ国勝山館遺跡の夷王山の墳墓群から十七世紀中期以前のアイヌ民族の墓が出土、上ノ国町/Y
- 7/24（月） 明治時代に入手、利用されたとされる蝦夷錦三枚を発見、厚岸町/D（夕）
- 7/31（月） 7/30（日）より旭川市博物館で『発掘された日本列島2000』開催、旭川市/Y
- 8/5（土） 「第8回地域伝統芸能全国フェスティバル 日本のみつり ふるさと・旭川2000」が8/10（木）より開催、旭川市/AS
- 8/8（火） 目梨泊遺跡から重要文化財級の遺物三点出土、枝幸町/D
- 8/22（火） 垣ノ島B遺跡より国内最大級の縄文時代早期末の漆製品六点出土、南茅部町/Y
- 8/29（火） 「遺産を守る—文化財保護50年—」連載/Y
- 9/7（木） 『アイヌ神謡集』を残し十九歳で死去した知里幸恵の遺品を集め『知里幸恵の世界展』を9/16（土）から開催、登別市/AS
- 9/18（月） アイヌ民族文化の伝承、保存に貢献した萱野茂氏、考古学研究者の北構保男氏、書家中野北溟氏らが北海道功労賞の受賞者に/AS

※A：網走新聞 AS：朝日新聞 D：北海道新聞 Y：読売新聞
複数紙掲載の場合は抜い大きい方を紹介しています。

■寄贈資料 (7~9月)

○北海道アイヌの木彫り熊が次の方々から寄贈されました。

堀 サチ子氏 (深川市: 5点)
 大久保峰子氏 (旭川市: 1点)
 中村ミサオ氏 (江別市: 1点)
 笹原 辰江氏 (旭川市: 2点)
 紅林久民子氏 (江別市: 2点)
 国沢 勲氏 (江差町: 1点)
 今井 敏恵氏 (小樽市: 1点)
 三上 剛氏 (京都市: 1点)
 畑野 健次氏 (函館市: 1点)
 佐々木三幸氏 (標茶町: 2点)
 藤島 八也氏 (小樽市: 1点)
 加藤 照子氏 (深川市: 1点)
 佐々木玲子氏 (札幌市: 1点)
 高井喜代子氏 (岩見沢市: 1点)
 高瀬 栄子氏 (釧路市: 2点)

○ウイルタの木彫品が札幌市の西村節三氏から寄贈されました。

木偶 (2体一組)、かい付船模型、すりこぎ付すりばち、さじ、フォーク (各1点)

○エベンのバッグほかが東京都の風間伸次郎氏から寄贈されました。

トナカイ毛皮製バッグ (2点)、トナカイ毛皮製靴、手袋、トナカイ角製彫刻、トナカイ毛皮、ウサギ毛 (各1点)

■執筆者から贈呈を受けた書籍等 (7~9月)

・長澤真史2000『モンゴルの素顔 — もうひとつのガイドブック —』
 東京農業大学出版会
 ・長澤真史2000『モンゴル国農業学術調査報告書』東京農業大学生物産

業学部生物資源開発研究所
 ・菊池勇夫2000『飢饉—飢えと食の日本史—』集英社新書

■主な来館者

6/30 (金) 冷泉家時雨亭文庫
 事務局長 冷泉貴実子氏
 7/29 (土) 北海道東海大学
 助教授 沖野 慎二氏
 8/26 (土) 東京大学
 助教授 佐藤 宏之氏
 8/31 (木) オホーツク文化研究家
 北構 保男氏
 9/16 (土) 上海博物館
 考古部副主任 宋 建氏
 9/30 (土) 笠懸野岩宿文化資料館
 館長 松沢 亜生氏
 学芸員 国井 洋子氏

■行事案内 (11~1月)

11/11 (土)
 博物館クラブ
 「イヌイト・ヨーヨーをつくろう」
 11/15 (水)
 講習会
 「ウイルタの手袋“マンパッカ”づくり」
 12/9 (土)
 博物館クラブ「火おこし」
 12/27 (木) ロビーコンサート
 1/10 (水) ~3/25 (日)
 開館10周年記念企画展
 「グレートジャーニー〜北をめざした人類の子孫たち〜」
 1/19 (金)
 開館10周年記念講演会

「グレートジャーニー〜人類400万年の旅をたどる〜」

■その他の行事報告 (7~9月)

9/9 (土) 博物館クラブ
 「鹿笛をつくろう」

■観覧者動向 (7~9月)

	常設展示	特別展
7月	4,122	886
8月	5,417	2,313
9月	4,611	1,410
計	14,150名	4,609名

■友の会会員募集中

北方民族博物館友の会会員を募集中です。友の会では季刊誌「Arctic Circle」や「友の会だより」をととして北の文化を紹介しています。年会費は3000円です。すでに会員になられた方は、お知り合いの方にもご紹介下さい。詳しくはお問い合わせ下さい。

■編集後記

初めて体験した北海道の夏。7月から9月にかけて発掘、発掘の日々。北見枝幸でオホーツク文化の竪穴住居址、常呂町で縄文・続縄文の墓^{なつみ}とオホーツク文化の竪穴住居址を調査。蚊、ブヨ、蜂から逃げ回りながら、とても有意義で、勉強になった夏、でありました。(角)